

かつて慈恵に在学した興味ある人物

その三 最初の女子学生・松浦里子と本多銚子

成医会講習所は明治14年5月1日開校した。そしてほぼ同時期に二人の女子学生、松浦里子と本多銚子*を入学させた。本稿はその頃の医育環境と、その後の二人の生きかたを記したものである。

女医草創期

明治元年(1868)、維新政府は西洋医術の採用を決定した。医学は西洋に限る、漢方は新時代にそぐわないというのが政府の一致した見解であった。そして明治7年8月に発布した医制によって、従来野放しになっていた医師の開業行為を国家による免許制にし、医師免許を試験制(医術開業試験)にするということになった。しかしこの試験制には例外もあり、明治12年からは東京大学(当時唯一の医科大学)の卒業生は無試験で免許が与えられると改正された。試験科目も何度か改定されたが、明治16年からは、物理、化学、解剖、生理の前期試験と、病理、薬物、内外科、眼科、産婦人科の後期試験とに分けられ、後期にはさらに実地試験が加えられることになった。

医師になりたいものの多くは、この試験に合格するための受験予備校すなわち医学校に入らねばならなくなった。この要望に応じて明治7年ころからこの種の医学校が新設され、明治12~3年ころには全国で40校以上にも増えた。医術開業試験は難しいには違いないが、医学校で勉強して、この試験に

* 慈恵医大85年史、100年史には銚子となっているが、銚子と書かれた文献もある(本稿の文献2)。せん子という記載(明治25年10月15日の毎日新聞、明治29年4月9日の報知新聞)もあるので、銚子の方が正しいと思われる。

合格しさえすれば医師になれるわけであるから、我もわれもとこの種の医学校に殺到した。当時最大の医学校であった済生学舎の記録にも、「学校の方針が、……来る者は拒まず、月謝さへ納めれば、といふので、どしどし生徒を入学させていましたから、校舎の収容力をはるかに突破して、いつも教室は超満員、机が足りない、腰かけが足りない、廊下のそとまで生徒がはみ出して、なかには外にいて窓から首を入れて講義を聞いているような者さえある始末でした」とある（吉岡弥生）。

男性にとっては自由に入学でき、受験資格もあり、勉強しさえすれば医師になれる時代になったわけであるが、しかし医師志望の女性にとってはまだまだきびしい時代であった。まず医学校に入る資格がなかったし、またもし何らかのてずるで入学でき、懸命に勉強したとしても、開業試験を受ける資格がなかった。それだけに、この時期女医になった人々は言語に絶する苦勞をしていたのであった。

日本女医第一号・荻野吟子

日本女医第一号・荻野吟子（1851-1913）はいまでも日本女医の元祖として尊敬を一身に集めている人であるが、医師になるまでの彼女の生い立ちはまさに苦難の道そのものであった。まだ田舎（埼玉県大里郡泰村）にあった16歳の時、（普通の娘がそうであったように）親がきめた男の許へ嫁がされたが、しかしその夫なる男は、利発な吟子の話相手になるような人物ではなく、その上いやな性病までうつされてしまった（そして精神病という口実で実家にもどされた）。

東京に出た吟子は、まず病気を癒すために順天堂病院に入院した。しかし病院での、男性医師のまえで体をみせる身のすくむような羞恥と屈辱は、病苦にもまして吟子を苦しめた。二年後退院した彼女は、以後同性のための女医になることを難くかたく誓うのであった。

とりあえず開校したばかりの東京女子師範学校（現・お茶の水女子大）に入り、そこを卒業した。そして同校の教授の紹介で、当時の医学界の大物であり陸軍軍医監であった石黒忠憲に面会することができた。吟子は石黒に、何

としても女医になりたい旨を切々と訴え、何とか医学校を紹介して戴きたいと懇願した。石黒はいくつかの医学校にあたってみてくれたが、やはり何れから「女子の入学はご辞退申し上げたい」という返事ばかりであった。石黒はようやく下谷練堀町の好寿院という医学校に頼みこんで、吟子の入学を許可してもらった(明治12年、吟子28歳)。もとより女子学生は吟子ひとりだけであり、生活とたたかいながら、ここでも彼女は女性蔑視の日々を耐えねばならなかった。そして3年間の苦学も報いられて明治15年、好寿院をめたく卒業することができた。

しかし、苦難はむしろ卒業のあとにあった。医師開業試験の願書を内務省に出したが、同省からは前例がないということで簡単に却下された。再度提出したが、これも拒否された。今までの努力がすべて水泡に帰したような気がした。そのときの悲痛なおもいを、吟子は次のように残している。「……願書は再び呈して再び却下されたり。思うに予は生きてより斯くの如く窮せしことあらざりき。恐らくは今後もあらざるべし。……小家を出てかぞうれば、早くもここに十有余年、人世の辛苦既に味わい尽くせるの暁、世はいまだ予を容れず、世容れざる怪しむに足らず。親戚朋友嘲罵は一度び予に向かって湧きぬ。進退はれ谷まり百術総て尽きぬ。肉落ち骨枯れて心神いよいよ激昂す。……」と。

しかし、「心神いよいよ激昂」した吟子はもちろん志をひるがえすことはなかった。当局もその熱意に動かされて(石黒の口添えや女医志望者一同の強い請願運動もあって)、ようやく受験の許可を出した。こうして吟子は、明治17年に前期試験に及第し、翌18年に後期試験に合格して、女性の医術開業免許第一号の栄誉を獲得した(34歳であった。女医第一号となった荻野吟子のその後の生涯は、渡辺淳一著『花埋み』に詳しい)。

面白いことに、成医会講習所の松浦里子(1861-1891)も、吟子と同じ明治17年の前期試験を受験していた。しかし不合格であった。病弱(肺結核)の体に鞭打って奮闘したのであったが残念であった(女子の受験者4人のうち合格したのは荻野吟子だけであった)。成医会講習所ではすでに(明治14年から)女子学生を別科生として入学させていたのである。講習所の校長であ

り、また時の海軍軍医監でもあった高木兼寛は、早く英国に学び、女医の活動をみていたので、我が国の女医教育にも強い関心があった。そして明治10年半ばから自由民権運動が盛んになり、それに伴って女医問題も盛んに議論されるようになったので、彼はまず当時の女子の能力が医師に適するや否やを試す意味もあって、女子教育では最高と称せられた竹橋女学校（東京女学校）の生徒中二人の才媛（松浦里子と本多銚子（せん子、1864-1922））を選び、同講習所に入学させた。

松浦里子はすぐその翌明治18年の前期試験に合格し、その調子でいけば荻野吟子に次ぐ女医第二号になる筈であったが、肺結核のため体調思わしくなく、残念ながら後期試験の受験を諦めざるをえなくなった。兼寛はこれにいたく同情し、彼の設立になる有志共立東京病院で療養させ、後には看護婦取締として看護婦の指導、監督にあたらせた（後述）。一方、本多銚子の方は、明治19年に前期試験に及第し、翌々21年には後期試験にも合格して、日本で第四番目の女医たる栄冠をかちえた。そして高木兼寛の期待に十分応えたのであった（後述）。

女医第二号・生沢クノ

荻野吟子は（かつて開業試験の受験許可に奔走していた頃）浅草の桜井産婆学校で、ある女医志願の女性と出会い、たがいの苦労を語り合ったことがあったが、それが13歳年下で女性第二号になった生沢クノ（1864-1945）であった。クノは医家（埼玉県深谷町）の生まれであったので、わずか13歳で医師を志し、東京に遊学した。クノの場合も、産婆学校その他で散々苦労した後、やっと神田の東亜医学校に入学が許された（明治15年）。彼女の再三再四の請願に、学校当局もとうとう根負けした形であった。しかしこの東亜医学校も、何人かの講師（森林太郎、賀古鶴所ら）が相次いで留学することになり、廃校の止むなきにいたったため、クノは再び別の医学校に入り直さねばならなくなった。彼女はここで済生学舎を選んだ（済生学舎は高橋瑞子（後出）の努力によって丁度そのころ女子への門戸が開かれたばかりであった）。しかしこの済生学舎も実習が十分できないことを知り、一年ばかりで退学し、

今度は有志共立東京病院で高木兼寛について臨床の实地指導を受けた。自信をつけたクノは、女子の受験が許可された年の翌明治18年に前期試験にパスし、翌々19年には後期試験にも合格して、栄えの女医第二号になった(明治16年頃、好寿院の荻野吟子、済生学舎の生沢クノ、成医会講習所の本多銚子らが盛んに受験許可の請願運動を展開していたが、この運動が女子の受験を許す大きな力になったといわれている)。

女医第三号・高橋瑞子

女医第三号になった高橋瑞子(1852-1921)についても簡単に触れておきたい。彼女は愛知県の没落士族の娘である。世の辛酸をなめつくし、産婆として一度は自立したものの、どうしても女医になることを諦めきれず医学校をさがしていた。最初に門をたたいたのは成医会講習所であったが(明治15~6年頃)、しかしここでは月謝(1円20銭)を半年分前納しなければならず、貧しい彼女には入学することができなかった。特別なてずるもない彼女は、こうなっては済生学舎に何としても頼むしかないと考えた(済生学舎なら毎月1円ずつの月謝ですむのであった)。当然のことながら女子の入学は前例がないということで簡単に断られた。しかし彼女は、門前に三日三晩立ち尽くし、ついに校長の長谷川泰を根負けさせ、入学を許可させた。

作家・杉本苑子は、その時の情景をつぎのように描写している。

「学生の群の中から、肩先きの褪せた薩摩緋に、水をくぐったよれよれの袴、半白瘦軀の老書生が声をかけた。

“あんた、毎日校門に立っているが、待ち人でもあるのかね”

“あるんです。待ってるんです。長谷川泰先生をね”

“長谷川なら、わたしだが、……”

瑞子は飛び上がらんばかりに驚き、四つん這いに平伏した。そして緊張した地方なまりで入学を懇願した。……」。

瑞子はこのようにして済生学舎に入学することが許された。明治17年、時に年32歳であった。

しかしそこでの学生生活も決して楽なものではなかった。

「私の勉学時代はずいぶんみじめなものであった。なにしろ素寒貧のうえに、学費については、親からも誰からも一文の補助もうけていなかった。学校へだって金のある間だけ通って、そのうち一カ月もすると金がなくなるからやめて、また金をためて行くという風で、満足に行くことはできなかった」と回想している。当時の女医学生の生活は大なり小なりこのようなものであったらしい（今の女子医学生にはとても考えられないことである）。

こうして瑞子は明治18年の前期試験に及第し、さらに順天堂病院で実地を学んだのち翌々20年にめでたく後期試験に合格した。日本三代目の女医になったのである（35歳であった）。彼女は日本橋で開業し、羽織・袴をつけた男装の女医として有名であった。

看護婦取締になった松浦里子

高木兼寛が、当時の女子の能力が女医に適するかどうかを試す意味もあって、その頃女子教育では最高といわれた竹橋女学校生徒の中から才媛、松浦



看護婦取締・松浦里子（1861-1891）

里子と本多銚子の二人を成医会講習所に入
学させたことはすでに述べた（同講習所は
明治14年に開校しているの、これとほぼ
同じ頃二人を入学させたわけである）。兼
寛はその頃、海軍医務局学舎（軍医学校）も
開校したので、一時期、講習所の生徒と医
務局学舎の生徒が一緒に教育をうけたこ
とがあった。ある医務局学舎の生徒は、「自
分は医務局学舎一期生10名の一人として入
学したが、しばらくして、女性を交えた服
装のまちまちな成医会の生徒が、われわれ
の背後で聴講するようになった」と書いて
いるが、この女性とは、松浦里子と本多銚
子のことであった。

二人とも、解剖実習を終えて平然と芝の

暗闇を帰っていったというから、相当の女傑であつたらしい。ともに幕臣の娘で、そのうちの松浦里子は、その後肺結核を病み、明治18年に(荻野吟子に次いで)生沢クノと一緒に前期試験に合格したものの、病状がすすみ、後期試験を受けることができなかつた。兼寛はこのことを深く同情し、有志共立東京病院で十分療養させた。そして彼女は、病状が回復するころから次第に看護婦の道を志すようになり、明治19年9月、同病院に看護婦補として採用された。同年12月、看護婦となり、さらに明治20年4月からは、ミス・リード(M.E. Reade)の後をうけて看護婦教育所の取締に就任した(同教育所は明治18年に設立された我が国最初の看護婦学校であつた。そして米人宣教師ミス・リードが初代取締に就任していた)。時に里子26歳であつた。

松浦里子は、体こそ弱かつたものの、頭脳は明晰、人格的にも温和で親切で、頼り甲斐のあるしっかり者であつた。大関和子(東大病院外科婦長)は、かつて里子に会つた時の印象を次のように回想している。

「里子姉は医学に志して修業せしも、身体繊弱にして繁劇なる学務に堪ゆる能わず、遂に身を看護婦事業に委ね、二十年四月同医院看護婦取締となれり。或る日妾職務上同氏の教を乞んとして慈恵医院に訪問せしに、時恰も手術中なりしをもつて応接室に於いて暫時待てり。待つこと三、四十分にして同姉は面接せられたり。姉は容貌秀麗動静肅性温和にして言語正しく、一見以て一方の長たる態度を顕し、其の風采たるや今尚眼前に彷彿として、実に敬慕の念、禁ずる能わざるなり。姉の妾に面接せられし時は、紺地紬に藍と白縦縞の筒袖を美に着し、白の前掛及び皮帯を着け、頭には白帽を戴かれぬ。其活発にして凜然たる仕度は妾の他に多く見ざるなり。其日妾は看護婦元締の方法と実地教授の仕方に就いて教授を乞ひしに、心よく之を承諾せられ、其経験と実地とにつき懇篤に説き給ひ、尚参考の爲にとて、各病室に伴われ、看護婦諸姉の勤務の方法又は交代の時間等委細教示せられたりき。見るに難く、学ぶに人なきの時に於いて、姉より授けられたる一片の恵みは、今更悼懐するも感謝の念に堪えざるなり。姉の徳たるや、叱責すべき時に於いて之れを忍び、却つて自分を責め、以て影に陽に当人をして其非を悟らしめしと云う」と。

松浦里子は敬虔なクリスチャンであった。看護婦生徒が彼女の部屋を訪ね、話しが個人的になるといつも「人はどうしても神様を信じなければいけない。貴方もキリスト教を信仰しなさい」と云ったという。初代取締ミス・リードとの親交はごく短いものではあったが、里子の信仰を深めるにはきわめて意義深いものであった。

明治21年2月、里子の教え子たち5名が我が国最初の正規看護婦として世に出たが、当時の看護雑誌には「されば院長高木師の精神とリード師のかたき信仰と、松浦師の慈愛とによりて養成せられし第一期卒業生は、明治21年2月を以て卒業授与の盛典を挙行され、神と人との前において栄冠をうけられぬ」書かれている。里子は兼寛の恩義に報いるべく懸命に努力していたのである。

松浦里子は、対外的にも相当活躍していたらしく、荻野吟子が中心になってつくった大日本婦人衛生会にも、5人の幹事の中に選ばれている。しかし、こうして内外共に活躍し、また多くの人々から慕われ期待された里子も、明治23年頃から再び病が重くなり、一年余りの療養加療も功を奏せず、明治24年8月24日、30歳の若さでこの世を去った。優れた才能に恵まれながら、病弱のため、初志を貫徹できなかった彼女はいかにも哀れであった。高木兼寛も、彼女の死を心からいとおしく思ったのであろう、青山の墓地に手厚く葬った。自然石のお墓の碑面には、誇らかに「故松浦里子之墓」と刻まれている。またその裏面の墓誌銘には「明治廿四年八月廿六日永眠 里子者文久元年五月十五日誕生明治十九年九月為東京慈恵医院看護婦補同年十二月為看護婦翌廿四年四月擧于看護婦取締心得同廿三年一月累進于一等看護婦取締同廿四年八月廿六日病歿 享年三十有一歳」と書かれている。

慈恵最初の女医・本多銚子

本多銚子(1864-1922)は旗本の一人娘であった。父は彰義隊の頭取として活躍した本多晋であり、母は有名な伊豆菰山城主・江川太郎左衛門の江戸詰家老・雨宮忠平の長女である。銚子は幼いころから才媛の誉れたかく、10歳の時ミス・ツルーという米国婦人宣教師の家に預けられて英語を学び、14歳

の頃には相当上達していたらしく、全権公使・川瀬真孝子爵夫人（江川太郎左衛門の息女）等のためしばしば外人客の通訳を勤めたという。また竹橋女学校の頃は、成績抜群のため昭憲皇太后の御臨校の際には、英語朗読と日本字の御前揮毫をつとめ、その都度恩賜品をいただいたといわれている。高木兼寛が、銚子を成医会講習所の抜擢女子学生の一人として選んだのも、理由はこのあたりにあったのであろう。

しかし同講習所での勉学は、多くの男子学生の中で苦労も多かったらしい。次のような回想を残している。

「そのころの女医学生は、男の学生に圧迫されて、解剖の標本なども十分にみる事ができないため、夜ひそかにちょうちんをつけて高輪の泉岳寺墓地に行き、あそこで頭蓋骨を一つ、こちらで大腿骨を一つと、ひろい集めて持ち帰り、勉強しました」と。勉強のためとは云え、うら若き女性が真夜中に提灯をつけて墓地で人骨を拾っている姿は、想うだけでも背筋が寒くなる。学生数も少なく、わりに設備が整っていた成医会講習所でさえ、女子学生にはやはり勉強し難いところであったのである（今の教育環境を考えると夢のようである）。

銚子はこのような苦労に抗しつつよく勉学し、明治19年に前期試験、同21年に後期試験に合格した。24歳であった。日本の女医第四号（慈恵最初の女医）の榮譽を担ったのである（前述）。彼女は翌年、林学士の静六氏（明治33年に日比谷公園を設計した人）を養子に迎え、家庭の人となったが、同時に芝新堀町の自宅に開業し、医療にも専念した。翌23年、静六氏がドイツに留学してからは一人日本に残り一層医療に精励し、患者は門前列をなしたといわれる。またその頃、東京慈恵医院では洋行帰りの女医・岡見京子が婦人科を担当していたが、銚子は業務の傍らいつも出張してよく彼女を助けた。慈恵医院の看護婦教育所でも同僚・松浦里子をよく助け、同教育所の講義を受け持っていた（高木兼寛から受けた恩義を精一杯報いようとしたのであった）。講義といえば、横浜フェリス女学校にもでかけて行き衛生学の講義をしていた。まことに充実した多忙な生活ぶりであった（これは余談であるが、岡見京子はアメリカのペンシルベニア女子医科大学を卒業した女医（ドクター）で、綺麗な女性で



慈恵最初の女医・本多銚子
(1864-1922)

あったらしい。吉岡弥生は彼女を「洋行帰りの、背中から後光がさすような美しい人であった」と評している。

明治25年、静六氏帰朝後は、銚子は駒場の農科大学（東大農学部、現在は教養学部）の官舎に移り、赤坂に診療所をつくり、人力車で毎日往復して診療を続けた。その頃の銚子の活躍ぶりが当時の毎日新聞に出ている。

「芝新堀町にこれまで開業しいたる女医本多せん子（銚子のこと—筆者）は、先頃その良人本多ドクトルがドイツ国より帰朝し、農科大学の教授に任ぜしより、共に同学校の官舎に引移り、去り難き依頼の他は診察せざりしが、今

度赤坂新町に出張所を設け、広く治療するよし。聞く、同女医は日本女医師の率先者にして、明治14年より成医会の学生となり、高木、実吉両国手につき、慈恵医院にて解剖その他の実地研究をなし、終に医学全科を卒業し、尋で同病院の助手をなし、最も婦人病（子宮病）、小児科に妙を得たりと。またその薬価は上中下三等に分ち、患者の分限により随意に納めしめ、往診は遠近にかかわらず車代を受けず、且つ貧困者には博く施療をなすよし」と。これを見ると、高木兼寛が施療病院（有志共立東京病院）を設立したときの意気込みを、そのまま地でいったような人であったと思われる。兼寛の精神的影響が如何に大きかったかが分かるのである。

しかし、そのうち子供も多くなり、家庭の用事も繁忙になったため、涙をのんで診療を一時中止した。銚子の気持ちでは、他日子供が成人したら必ず再開するつもりであったらしいが、日常の生活に忙殺されてしまい、再び女医として活躍することはできなかった。

銚子も（松浦里子と同じく）熱心なキリスト信仰者であった。同情心にあ

つく、困る人にはなんでも与えてしまい、自分ではろくに着物も作ったことがなかったといわれる。本多家に集まる人達は、銚子を信頼すること篤く、奥さんの言葉ならどんなことでも聞くという風であったという。そして同家で働きつつ、銚子の世話になり、後に出世して博士になった人も十人を下らなかったといわれる。

有為の才能をもち、多くの人々に慕われた本多銚子も、持病の腎臓病には勝てず、大正11年、58歳で脳溢血を発して不帰の客となった(高木兼寛逝去の翌々年であった。持病、死病まで高木兼寛と同じであった)。

銚子が医者になって間もない頃、ある雑誌が「女医亡国論」なる論説を掲載したことがあった。それを見た彼女は非常に憤慨し、火のように激しい反駁文を書いた。これは、当時の女医の心意気を示すものとして、医学界の評判になった。このように激しい意志の人であったから、家庭の都合で医業を止めたことがよほど悔しかったらしく、彼女に私淑していた井手(竹内)茂代に会うときは、いつも「この状態では、再び医者として立てないかもしれないけれど、あなただけは私の分と二人分やって欲しい。神様に祈っているから」と口ぐせのように云っていたという(井手茂代は東京女医学校出身の女医第一号であった)。そして井手茂代が開業する時には、多額の祝金や、不足の品物を度々送ったり、また患者を度々紹介したりして、その後も徹底的に世話をし続けた。このことにいつも恩義を感じていた茂代は、それだけに銚子の臨終の時には、それこそ5日間不眠不休で、付き切りで、寝食も忘れて看病したといわれている。

男女共学その後

高木兼寛が女医候補として名門校から二人の才媛を選び、成医会講習所に入学させたことは繰り返し述べたが、この件に関連して不思議に思えるのは、二人とも揃って熱心なクリスチャンであったことである。何か意図的に選んだように見える。もう一つの不思議は、二人ともそれぞれ兼寛の期待に十分応えた筈なのに、その後は女子学生を一切採らなかったことである。この二点を簡単に考えてみたい。

英国から帰国した頃の兼寛は、医学教育において最も重要なのは宗教心であると信じていたらしい。その頃の彼の信念をしめすいくつかの資料が残っているが、その一つ（明治35年の讀賣新聞）をここに紹介する。

「彼（兼寛のこと―筆者）、その信念を医学校の教育に応用したり、すなわち彼その入学試験の中に品性試験なるものを設け、一々その志願者を呼び出してその信仰の有無を問い、自ら無宗教と号するものは惜し気もなくこれを落第せしむ。彼の経験によれば、その信仰を問われる際において、もっとも大胆にその信仰を告白するものはキリスト教徒にして、門徒（浄土真宗信者―筆者）これに次ぎ、他はほとんど云うに足らずという……また彼、この信念を看護婦教育に応用し、その初めリード嬢によりてキリスト教主義を病院内に鼓吹し、今漸く本願寺（浄土真宗―筆者）に近ずかんとす。しかもその成績のもっとも良好なりしは、キリスト教時代にして、今にして秀抜なる看護婦として社会に信用を有せるは、実にリード嬢時代のもののみなり……」というのである。これを読むと二人の熱心なキリスト信仰者を講習所に抜擢入学させた理由も分かるような気がしてくるのである。

では、兼寛は何故その後女医希望者を入学させなかったのだろうか。筆者の推論を先に述べると、それは学生の男女問題、異性問題ではなかったかと思うのである。本多銈子も述べているように、成医会講習所にも「解剖の標本など殆ど見るができなかった」ような男子学生からの嫌がらせや横暴がかなりあったらしいのである。済生学舎ではさらに明治30年以降まで女子学生を入学させていたため、問題はさらに深刻化していった。女性蔑視に由来する女子学生排斥運動や、さらにこれに対抗するための女子学生の結社（「女医学生懇談会」の結成）など、次第に社会問題化しつつあった。その上、済生学舎では放蕩な学生も相当いたらしく、女子学生を欲望の対象として追い回し、暴力沙汰にまで発展し、時には刑事問題になることさえあった。学校当局も困り果て、遂に明治33年秋から女子の入学を取り止め、さらに34年3月には在学女子学生全員を退学させた。当局は不良学生を取り締まる代わりに、数のすくない女子学生を追放したのである（余談であるが、吉岡弥生はこの後輩の受難をみかねて、明治33年12月、自宅の一室に「東京女医学

校」を開いた。これが後の東京女子医科大学になるのである)。

高木兼寛は、成医会講習所におけるごく短い経験ではあったが、その中から男女共学の危険性を予見し、それはまだ時期尚早であると結論したのではないだろうか。

参考図書

- 1) 吉村 昭：日本医家伝。講談社，東京，1984.
- 2) 多川 澄：日本女医五十年史 (1-26)。医事公論，1943.
- 3) 編集委員会：慈恵看護教育百年史。東京慈恵会，東京，1984.
- 4) 編集委員会：東京慈恵会医科大学百年史，東京慈恵会医科大学，東京，1981.